

麻織物の民俗服飾学的研究 - 栃木県の大麻 -

樋口富枝。東京家政学院短大の岡野和子

目的 これまで関東地区各地にわたり、在来型労働者の調査研究を実施してきた。このたびはその調査地の一つである栃木県（下野）粟野町一帯で生産される大麻をとりあげることとした。ここは古くから野州麻と呼ばれる麻河であり、衣料繊維として苧麻につぐものであった。現在では生活必需品として全国生産量の98%（43年現在）を占めているところである。当地の麻は繊維質が細く短く、しかも表面が平滑で燃性に乏しいことから、紡績適性にかくという。その沿革を求めると共に、社会的状況の影響で、生産が変動する実態と現在の状況をあきらかにしたい。現在生産量は年々激減しつつあり、栽培者の高齢化から、あと10年もすると消滅するのではないかと懸念される。その栽培、調製技法を記録にとどめる必要があるものと思われる。

方法 現地調査は、麻栽培業宅塚平氏（上郡夏那栗野町）、麻糸向屋白井浪之助氏（栃木市沼和田町）。生産量、作付面積、栽培状況など統計資料収集は、鹿沼農業改良普及所、栃木県農務部首郡園農業課。文献史料は『古代納入織物一覽』、『農作物の国別分布図』統計年鑑（M12年）、『麻向屋神田家勘定帳』等。

結果 1. 粟野町一帯は、温暖（16~25°C）で湿度が高く、大麻栽培に適する気候である。
 2. 10世紀ごろの下野国では、既に調、席、中男作物、交易雑物としてあげられていた。
 3. 文久2年から麻取引中継商であった神田家文書には、野州麻の取引が多くみられる。
 4. 近年の需要、用途は芯繩（げた、ぞうり用）48%、縁起物（結納品、神社仏閣、建前等）39%、ろづる、パフキング13%である。